

作物名: いちじく
病害虫名: キボシカミキリ (学名: *Psacothea hilaris*)



写真1 キボシカミキリ成虫



写真2 幼虫の食害痕 (木屑が排出される)

1 被害の特徴と診断のポイント

- 成虫は、葉や樹皮を食害する。
- 幼虫は枝幹に食入し、1～2年間にわたって樹体内を食害する。
- 多数の幼虫に食害されると樹勢が低下し、最終的には枯死する。

2 生態

- 成虫は体長15～30mm程度で、夏季から秋季に出現する。
- 東日本では、盛夏期以降に成虫密度が最も高くなるといわれている。
- 主に主幹や主枝に産卵し、数か月にわたって産卵する。産卵数は、雌1頭で数百個といわれている。
- ふ化間もない幼虫は主に樹皮直下を食害し、3齢程度に成長すると木部深くまで食入する。
- いちじくのほかに、桑やこうぞ等のクワ科植物を好む。

3 防除方法

- 産卵部分を木づち等で叩いて卵を圧殺する。
- 被害の進んだ枝はせん除し、枯死樹は伐採して、園外に持ち出して処分する。園内に放置しない。
- 薬剤散布は、幼虫ふ化直後から食入初期に行う。エアゾールタイプは、幼虫の食入部にノズルを挿しこんで噴霧する。なお、幼虫が木部深くまで食入すると、薬剤の効果は期待できない。

4 出典

(1) 参考文献

- インターネット版 日本農業害虫事典 (全国農村教育協会)
- ひと目でわかる果樹の病害虫第二巻 (改訂第二版) (日本植物防疫協会)

(2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影
- 宮城県大河原農業改良普及センター撮影
- 宮城県亘理農業改良普及センター撮影



写真3 成虫に食害されたいちじくの結果枝

(令和7年6月作成)